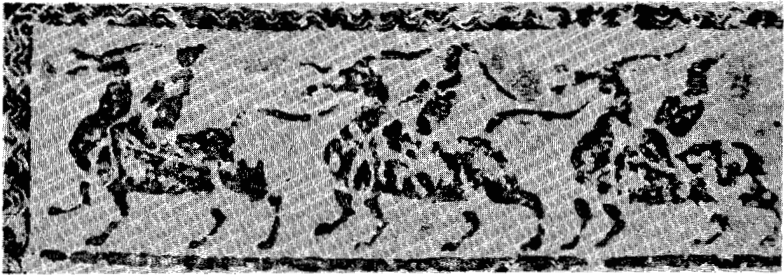


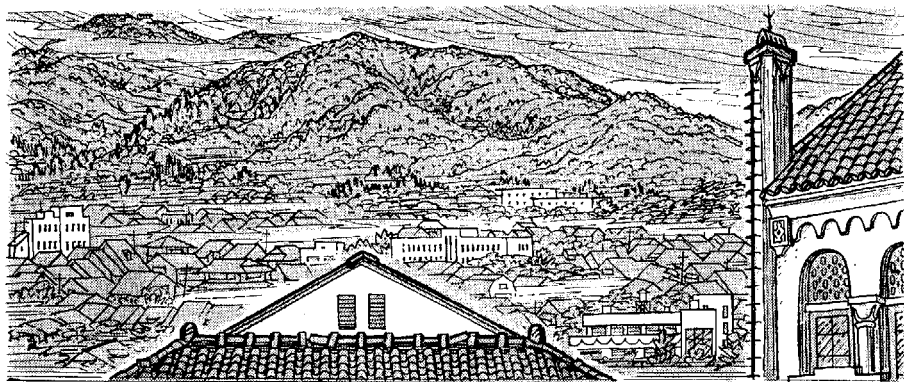
第 二 六 号



1 9 8 2

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X



人 文 第 二 六 号

1981年12月—1982年5月

も く じ

随想……………	角山 榮	2
私にとつての人文研……………	角山 榮	
唐代史研究会のことども……………	礪波 護	
講演……………		6
道教とは何か……………	福永 光司	
白楽天の詩に見える酒……………	今井 清	
本のうわさ……………		10
上山春平『空海』(柳田)・吉田光邦『きもの——染め・織り・文様』(前川)・梅原郁『夢溪筆談』(吉田)	染め・織り	
共同研究の話題……………		14
シンボリズムの探究……………	山下 正男	
傅衣凌氏の中国封建社会論……………	小野 和子	
情報の新経済史をもとめて……………	山本 有造	
旅……………		17
ケベック弁(多田)・休息する人びと(田中)・孫文の故郷(狭間)・泳がざるの記(園田)	孫文の故郷(狭間)	
書いたもの一覧……………		25
受賞(13)・人のうごき(13)・おくりもの(22)・外国人研究員(23)・招へい外国人学者(23)・お客さま(23)・東洋学文献センター講習会(24)・感銘を受けた本(24)		

私にとっての人文研

角山 榮

もう四、五年も前のことである。太田武男先生と人文の事務室で顔を合わせたときのこと。突然先生から「あなたはいつ停年ですか」と尋ねられた。「いやー、停年までまだ七、八年もあります」と答えたら、そのとき先生は、ほんとうに驚いたといった顔付きで、「長い間、あなたをずっとお兄さんと呼ばかり思っていました」といわれたのには、こちらの方が恐縮するやら驚くやら。

太田先生は人文研でも最古参教授の一人である。その太田先生に長い間「お兄さん」だと思わしめていたとすれば、それは私の不徳の致すところだが、それほど私と人文研とのつき合いは古い。

いつの頃から定かでないが、昭和三十年頃には、当時ジェントリ論を提唱していた私は、田中裕さん、飯沼二郎さん、富岡次郎さんらイギリス史を研究していた人たちの研究室を尋ねては、時間を忘れて盛んに議論をしていた記憶がある。やがて昭和三二年から河野さんを中心に、飯沼さん、上山さんから大塚史学の方法に批判的であったものが集まって、ほぼ月に一回研究



会をもつことになり、それまで以上に人文研を訪れることが多くなった。因みに、そのときの研究会の成果が、河野健二編『資本主義への道』（ミネルヴァ書房、昭和三四年）である。

ところで私が共同研究に正式に参加するようになったのは、昭和三五年から始まった桑原先生を班長とする「ブルジョワ革命の比較研究」からで、ほぼ同時に、既に始まっていた今西先生の「霊長類研究」にも参加した。今西班への参加を勧められたのは上山さんである。この研究会は生物学者や人類学者の集まりで、歴史家や経済学者のグループではえられない知識や知的刺戟を与えられて、私にとって実に有益な研究会であった。私の工業化のエネルギー史観、さらに『産業革命と民衆』『茶の世界史』も、今西グループからえた刺戟の賜ものであると思っている。その他河野・飯沼班からえた「世界資本主義」の構想も、私の学問的体系の柱になるもので、どうしてもひと言ふれておかねばならないが、スペースの関係でまたの機会にゆずりたい。

ともかく長い私の人生のなかで、人文研の共同研究からえられた成果がいかに大きな部分を占めているか、しみじみと先輩諸先生方の学恩を噛みしめている。



唐代史研究会のことども

磯波 護

五週にわたったテレビ番組、元駐日アメリカ大使ライシャワ
ー教授の『日本への自叙伝』は、われながら不可思議なほど、
画面に魅せられ、放映後、さっそく同名の単行本を買求めて、
一気に読みおえた。それは、日本僧円仁の唐代中国への旅行記
たる『入唐求法巡礼行記』の全体像を解明し、日唐の文化交渉
史を跡づけんがため、日本生まれの一アメリカ人研究生が、一
九三〇年代に師を求めて世界中を馳せ回った苦勞を、追体験し
ていたからであらう。

『日本への自叙伝』を読んだ直後に、箱根で開かれた「唐代
史研究会」の夏期合宿に参加した。この会は、一九六九年夏に
ケンブリッジ大学で開催された「唐代研究会議」に、池田温氏
と私が招待されたことが一つの機縁で、当時、人文科学研究所
に流動研究員として滞在中であった菊池英夫氏の肝煎で、親分
肌の鈴木俊氏を中心に、一九七一年に発足したものである。毎
年十一月の半日、本郷学士会館で例会を開くほか、はじめの二
年は妙高の池の平で、その後はずっと箱根で、三泊四日の夏期
合宿をして、近況報告と研究発表を行なってきた。参加者も次
第に増加し、公式行事たる午前・午後の研究発表時の討論もさ



ることながら、昼食時や夕食後の無礼講こそ、またとえがたい研究交流の場となっている。

今度の合宿の近況報告では、会の常連であった西村元佑氏が今春に亡くなられたのを偲ぶ追悼の辞の相継いだのが印象的であった。会の長老であった鈴木俊教授、ケンブリッジでの共同議長の人、エール大学のアーサー・ライト教授、ともに数年前に亡くなっておられる。そして今年の四月、シカゴで唐代研究会が発足したが、ライト教授いませばなられたであろう会長に門下生のイリノイ大学のウェックスラー教授、事務長にトロント大学のギッソ教授が就任したという。一九五〇年代の前半に来所されたライト教授のみならず、ウェックスラー・ギッソ両教授も、博士論文の執筆のため、一九六〇年代の末に研究所に長期滞在され、その成果はそれぞれ『貞観政要』『武則天』なる著書として公刊されている。

ところで、中華人民共和国では、一九八〇年秋に西安で唐史研究会が設立された。その会長になられたばかりの武漢大学の唐長孺教授を、四ヶ月間、客員教授として研究所にお迎えし、南北朝隋唐史の分野における初めての真の学術交流の場をもつことができた。先生は帰国に際し、「現説天涯若比鄰。蓬瀛飛渡覺身輕。唐風已自忘遊旅。漢學由来重洛京。史跡千年動禹域。靈文三洞探玄經。流風幾輩伝薪火。合向鴻都問老成。」なる長律を色紙に揮毫して下さり、老成とは宮崎市定先生のことだと附言された。唐先生にとっては、これが初めての外国旅行だったそうである。



講演



退官記念講演

一九八二年三月十九日
於 本館大会議室

道教とは何か

福 永 光 司

最初に「道教とは何か」という問題を考える手がかりとして、この京都の町に残っている道教的―道教と関連を持つ遺跡・遺物・遺構の代表的なもの六点左右を挙げてみたい。

その第一は京都御所。現在の御所は勿論平安京が造

られた時そのままのものではない。しかし平安京の古地図などと比較してみても建築構造は大体同じであり、南に承明門―古くは陽明門、東に日華門、西に月華門、本殿（南殿）として天皇の御座のある紫宸殿などという構成は造営当初とほとんど同じであり、これは道教の経典『玉佩金璫經』などの宗教哲学に基づく。

第二は京都御所の東北方、いわゆる「鬼門」に聳え立つ比叡の山頂が「四明」とよばれ、皇城鎮護の役割を果たすとされていること。「鬼門」は言うまでもなく道教の用語。「四明」も鬼門とセットにされて道教の神学書『真誥』などに見えている言葉と思想。

第三は東山三十六峰という呼び方もしくは考え方。

「三十六」という数字は、道教の教理学で中国全土の神仙修行の聖地を整理して「三十六洞天」と呼んでいるように、神学として重要な意味を持ち、一年三百六十五日の整数「三百六十」を陰陽の「二」で割り、さらに五行の「五」で割った数字。西本願寺の三十六歌仙、詩仙堂の三十六詩仙の「三十六」も歌仙、詩仙の語が端的に示しているように道教の神学と密接な関連を持つ。

第四は吉田神社の奥の院にある大元宮。「大元」もしくは「大元宮」は、吉田神道の教理学を建築物として具象化したものであるが、いずれも道教の神学の中

枢的な概念であり、聖宮である。なお吉田神社の節分祭で行なわれる「豆撒き」の行事も道教の「使鬼」の呪術と密接な関連を持つ。

第五は室町期の建造物である北山の金閣および東山の銀閣と、その庭園、岩石―石組み、泉水、茶室など。金閣、銀閣の名称は、『史記』封禅書に神仙の住む海島「蓬萊」の仙宮を解説して「黄金、銀もて宮闕と為す」とあるのなごに基づき、中国六朝隋唐時代の道教文献にもその記載が見えている。また、その建造物と庭園、とくに岩石、泉水との組み合わせは、道教の山水思想―蓬萊仙山の神学や岩石信仰とも影響関係を持ち、その茶室で喫する茶はもともと神仙の薬であった。なお、庭園内の山水に配置される鶴亀、松竹などの動植物もまた道教の神仙思想と密接な関連を持つ。

第六は西本願寺の対面所とよばれている大広間、いわゆる「鴻の間」に描かれた道教の仙女西王母と漢の武帝の障壁画、および同じく摘翠園の中にある「黄鶴台」。西王母の障壁画は道教の文献である『漢武帝内伝』に取材したものであり、「鴻の間」の「鴻」および「黄鶴台」の「黄鶴」もまた道教の神仙思想と密接な関連を持つ。

以上は京都の町に住んでいる我々が、この目で確認しうる道教的―道教と関連を持つ具体的な物件の幾つ

かを列挙してみたのであるが、ここで注目されるのは、わが日本国において道教的な思想信仰ないし物件が、それ自体として単独に存在するというよりも、多くの場合、仏教や神道―寺院や神社神宮と習合した形で、もしくは混濁折中された形で存在しているという事実である。そして、この事實はまた道教というものが日本に伝来する以前の中国本土において既に単一自足の宗教ではなくして、古来の土俗的呪術信仰や儒教の政治学的祭祀祈祷の理論や中国的に体質改善された仏教の教理儀礼などを多元的・重層的に折中習合する包括的、集大成的な複合宗教であったことを強く示唆する。

このことを明らかにするために、次に中国の思想史において「道教」という言葉（概念）が古来どのような用いられてきたかの具体例を検討し、それに即して「道教とは何か」の問題を文献実証的に考えてゆきたい。

プリント（会場で配布）に示されているように、「道教」という言葉（概念）は、中国の思想史において、最初に儒家が用い、ついでそれを否定的に批判する形で墨家が用いた。そして西暦紀元前後にインドから中国に伝来して、伝統的な漢字文化の中に全面的に組み込まれるに至った中国仏教（漢訳仏教）もまた自らの宗教を道教として理解し、道教と呼ぶ者をさえ生

じ、いわゆる民族宗教としての狭義の道教が自らの宗教を明確に「道教」の語を以て呼ぶに至るのは、信憑性を持つ文献資料に拠るかぎり、五世紀の初め、北魏の寇謙之の道教、同じく東晋末期の茅山道教に始まる。

そしてまた、この時期以後、南北朝、隋唐の時代に亘って大量に整備され製作される道教經典の内容を教理学として思想的に検討吟味してみると、そこには儒家、墨家、中国仏教の思想哲学が大幅に導入されており、道教の神学（教理学）が後次的にそれらを折中習合し、民族宗教として集大成したものであることが確認される（プリント参照）。

かくて、これらの検討吟味をふまえた上で、「道教とは何か」という問いに対する現在の段階での私の一応の答えを纏めて表現すれば、道教とは、中国古来のシャーマニズム的呪術信仰を基盤とし、その上部に儒家の神道と祭祀の儀礼思想、老荘道家の「玄」と「真」の形而上学、さらには仏教の業報輪廻と解脱、ないしは衆生済度の教理儀礼などを重層的、複合的に採り入れ、隋唐の時代において宗教教団としての組織と儀礼と神学とを一応完成するに至った、「道の不滅」と一体になることを究極の理想とする中国民族（漢民族）の土着的、伝統的な宗教である、ということになる。

白楽天の詩に見える酒

今井 清

一、酒量。相手と二人で二、三升（わが国の一升前後）。量を明記するのは、小榼二升酒・小榼三升酒・小花蛮榼二三升・白角三升榼の四例だけ。みな榼、しかも皆、人を招く場合である。榼は、林氏によれば、徳利の如きもの。他の容器については、なぜ量を言わないか、待考。両三盃・三数酌・十分一盞など、曖昧な表現は多い。

二、上戸か下戸か。猶嫌小戸長先醒とて下戸を輕蔑し、戸大嫌甜酒とて韓愈に一目置く。彼自身は、いわば中戸である。

三、どんな酒か。日本酒十六度に比し、僅かに三度（平岡説）。味は甘辛を住とする。唐人が甘い酒を好むというのは誤り。楽天の詩にも、甘くねばい酒を言っていない。それは長江流域の酒。又、春の酒は秋のに比べて甘い。だが彼は自家製の甘辛い酒を好む。詠

家醞、餅封貯後味甘辛。このこと、野客叢書も言うが、
氣候風土が酒の風味に影響することには氣附かぬ。

四、原料は黍。望黍作冬酒（村居臥病）。黍香酒初
熟（九日登巴台）。唯当多種黍、日醉手中觴（效陶潛
体詩）。

五、酒の効能は、生老病死の四苦を忘れさせる。生
苦—厭見簿書先眼合、喜逢盃酒暫肩開（2416）。老苦
—白髮生頭速、青雲入手遲。無過一盃酒、相勸數開眉
（2839）。病苦—独对多病妻……一盃聊自勸（0452）。
死苦—今朝収淚弔人廻……且遣琵琶送一盃（2680）。

六、神速にして効力倍增の卯酒。空き腹にしみ込む
午前六時の朝酒。白詩の卯酒の用例は十七。仏法讚醒
酬、仙方誇沆瀣云々（卯時酒）はその一つ。

七、花見の酒。作例多数。今一例を挙ぐ。数日非閑
王事繫、牡丹花尽始归来（0643）。日本のように桜一
辺倒ではない。牡丹を筆頭として、梅・桃李・桜桃・
杏・木蓮・海榴・辛夷・薔薇・山榴など多彩である。

八、宴会の酒。作例多数割愛。彼の生涯で最も華や
かな蘇・杭刺史の時代。その在職中のを一つ。対酒吟
—合声歌漢月、斉手拍吳歎。今夜還先醉、応煩紅袖扶。
だが彼の最も氣に入った土地は洛陽である。一例を挙
げる。酒每蒙酤我、詩常許起予。洛中婦計定、一半為
尚書（酬令狐留守尚書見贈十韻）。洛陽には知識人多

く、帝都名利の場から離れている。又、古人では陶淵
明を敬慕した。その名利に恬淡たる性格に傾倒し、琴
詩酒を三友とする趣味を踏襲した。效陶潛体十六首并
序など多数。

九、禪が第一等で、酒は第二等。引滿飲一盞、尽
忘身外緣（0384）、無如飲此銷愁物、一餉愁消直万金
（1034）、憂方知酒聖、貧始覺錢神（1008）、能沃煩虛
銷、能陶真性出（0470）など言うから、酒に勝る物は
無いと考えているようだが、実はそうでない。因君知
非問、詮較天下事。第一莫如禪、第二無如醉。禪能泯
人我、醉可忘榮悴（和知非）がその証左である。酒で
は満たし切れぬ部分を、禪が満たし得たのである。次
元の差とも言えよう。

十 専売の酒。磯波氏が資料を提供された。丸亀金
作「唐代の酒の専売」（東洋学報四〇ノ三、昭和三十
二年十二月）と岩波文庫旧唐書食貨志「醴醑」の条で
ある。前者は白詩を引用するので、それに譲る。



本のうわさ

上山春平著『空海』

(朝日評伝選24 B 6版三三一頁 朝日新聞社)



キラキラする光背を負う、遍照金剛像がある。そこでは、空海は生れ乍らの、真言密教の開山祖師である。日本仏教の偉大な思想家、空海の実像があるはずだ。近代、幾つかの沙門空海が、この問いに答えた。しかし、学者や作家の空海は、とかく瘦せたものとなる。

上山さんの『空海』は、御自身の還暦の年まわりに、古来の辛酉伝説をかさねての作品であるだけに、かなり抑えた手法ではあるが、従来の試みに止めを刺す私かな魂膽が、随処にうかがえる楽しい本である。手堅い文献批判の重層化で、従来の空海伝

の基礎資料、「御遺生」の腑分けをすすめて、つつ、求聞持体験への異常な思い入れと、得度の年時の資料堅めに、全力が注がれるのがそれだ。後半の対最澄問題も、結局はその一部にすぎぬ。言ってみれば、弘法大師↓沙門空海↓優婆塞空海↓優婆塞春平という超時空体験が、この本の進行を導いて、そこに上山哲学の方法が暗示される仕組みである。

上山さんが、東寺の長谷宝秀師より、求聞持を受けるのは、昭和十八年六月二十五日のことである。このとき、上山さんの体内に宿った、ナウボアキャシャギャラバヤ

オンマリキャリマリポリソワカの陀羅尼は、一千数百年の歴史の時空を溯上して、若き日の空海の体験に重ねられる。十八才の空海は、無名の一沙門よりこの陀羅尼を受けるが、上山さんの阿闍梨は、歴とした弘法大師伝全集十巻、弘法大師全集七巻その他の、関係資料の編著者であり、宗門随一の碩学であった。ところが当時の上山さんは、日にさしせまる我が身心の危機の方に、主要関心があって、関係資料の学問的解明には向わず、長谷師も又それを明かさなかつたらしい。要するに、上山さんは弘法大師に出会ったが、沙門空海の正体には気付いていない。この本は、そんな四十年来の宿題への答えであり、上山さんの方法も又そこから来ている。空海は、三十一才の入唐時まで、一介の私度僧であった。読者は、こんな結果に、驚かぬだけの用意が必要である。

さいごに、卒読後の小感を記すことを、あえてお許しねがいたい。この本のように、得度の年時を引きさげると、いったい空海というこの人の名のりは、何時から始まるのであるろう。虚空藏求聞持の行にはげむ仮名乞児は、果して無名の優婆塞であったか、

どうか。これを御遺告の無空や、教海にも
どすことは不可であるが、御遺告作者の苦
心も、じつはこの辺にあったようにおもわ

吉田光邦『きもの―染め・織り・文様―』

(二二種×一九種 一九九頁、主婦の友社)

このような書物は、美にたいするすど
い感覚と、技術についての広い知識をあわ
せもつ吉田氏だけがつくることができるの
であるう。さまざまなきもの美的世界が
カラー写真で復元されるいっぽう、本文で
は、そのような美をうんだ諸技術がやさし
く紹介されている。また、それらの技術の
背景にある日本社会の特質までが論じられ
ているのである。

本文では、絹、もめん、麻の栽培の歴史、
紡ぎ、織りかたからはじまって、刺繍、絞
り、さまざまな染めの技法にかんして、古
今東西の実例が、吉田氏に独特な、やわら
かな文体で解説されている。後半の「文様」

れる。御遺告以外の資料で、それを確認す
ることが必要である。

(柳田聖山)

の章にいたっては、全体の叙述の流れとは
少々異質だけれど、日本人の菊への美意識、
蝶、鳥への観かたまでが書きこまれ、また
最終章では、日本の近代化のなかで和服の
たどった運命があざやかに論じられている。
各章の配列にも心が配られていて、「絞
り」「鹿の子」が「ぬい」と「染め」をつ
なぐものとして語られていたり、染料の問
題は「染め」の最後に置かれていたりする。
カラー写真は、なまみの肉体がまとうは
あいとはちがった和服美をよく表わしてい
て、見事という他はない(とりわけ、小紋
染めの優品の諸写真)。友禅のパターン・
ブックである「ひいなる形」、もめんの「し

ま帳」などの魅力は、この書物での写真の
魅力と、おそらく同質のものであったろう。
明治いごになってとりわけ女性が和服を
きるのはプライベートな場に限定されたた
めに、和服にたいする美意識が衰弱してし
まったという吉田氏の主張は、おそらくあ
たっているであろう。そして、一月十五
日の和服女性の群がよく示しているように、
たとえパブリックな場においてもハレのさ
いにだけ和服を着るといのであれば、和
服の美はたちまち画一性になかに埋没して
しまう。吉田氏がいうように、和服の文様
はもともとから特定のコミュニケーション
・メディアの役割をも果していたから、現
代のパブリックな、ハレの世界での着物の
画一化はおそるべきことになる。吉田氏は
さいごに、美の発見を欠いた明治以後の衣
服観から脱するために、和服がこれから力
をもちうるかどうかを問うているようにみ
える。これはおもしろく、つらい問いであるう。
若い女性は一年に一、二回のハレの場の衣
服としか和服をみていないし、また、パブ
リックな場でも、プライベートな場でも、
まったく和服を着ない男性がますますふえ
ているのだから。

(前川和也)

梅原 郁訳注『夢溪筆談』

(一七、五種×一一、五種 第一卷二七二頁、第二卷三四頁、第三卷二九五頁、平凡社東洋文庫)

梅原さんの労作『夢溪筆談』訳注の書評を依頼された。が冒頭の凡例、また数内名誉教授の序にもあるように、本書の講読はわたしも参加していた研究所の共同研究として、ずっとつづけられたものである。そして一部の仮訳稿も書いた。そうした立場からみると、梅原さんや坂出祥伸さんたちの努力で出来上がった本書については、わたしはただ完成を悦びたいだけである。仮訳稿を全面的に書き改め、詳細な注も与えられた梅原さんらの仕事は、今後大きな役割を果たすことになろう。

数内名誉教授を中心として活動してきた

『記』も、講読に参加したなつかしい書物のひとつである。

そんなことを考えながら、この訳注書を書くてゆくと、ほとんど十数年前に読んだとき、さまざまに問題となったり、論をかさねた部分がいだされてくる。『夢溪筆談』は、自然科学や技術に関連する多くの小文があるので、早くからその面では注目されていたのだが、そうした視角を離れて頁をくついても、いくつかの項ではまた新しい知のおもしろさがある。書画や技芸などの章で。そしてふと江戸時代に盛行した、多くの日本人の随筆とくらべてみたい気になる。

いうまでもなく、中国には多くの随筆がある。そのなかでも沈括の筆談は、きわめて客観的に事実を記述するという特色をもつ。しかもその扱かう範囲はきわめてひろい。それは目次からすぐわかることである。いえば百科全書的なひろがりである。

その客観性や衆人の気づかぬところに注目するなどの点からみて、太田南畝や菅江真澄の随筆が、これに似るかもしれない。前者の『一話一言』、後者の旅路のなかでの記録などは、今も多くの史料的价值をもつ

ている。南畝はエリート官僚たる道を持て、真澄は孤独の旅に一生を送った。沈括は如何。

とはいえ、随筆はしよせん個人のためのもの、内心のためのものであった。とすればそれをすぐさま史料云々というのは、やはり後世のくだりたる姿かもしれない。むしろ中国や日本の随筆を読むたのしさを、この訳書からはくみとるべきだろう。

(吉田光邦)

受賞

○桑原武夫名誉教授は第三三回放送文化賞を受賞した 一九八二、二、一七

人のうごき

○浅原達郎氏を助手(東方面)に採用。
○久保由美氏を助手(日本部)に採用。
○井狩彌介氏(国立民族学博物館助教授)は当研究所助教授(西洋部)に配置換え。

○谷 泰助教授(西洋部)は教授に昇任。
○御牧克巳助手(東方面)は文学部助教授に昇任。

○角山 栄 和歌山大学経済学部教授と蜂屋邦夫 東京大学東洋文化研究所助教授を比較文化客員部門の併任教授、併任助教授として受入れた。(八一、四、一、八三、三、三一)

○多田道太郎教授(西洋部)は、八一年一月一九日伊丹発、モントリオール大学東アジア研究センターで日本文化に関する講義、コーネル大学等で日本文化に関するシンポジウムに参加、オックスフォード大学で日本文化に関する資料収集を終え、八二年六月二七日帰国。

○前川和也助教授(西洋部)は、八一年一月三〇日伊丹発、大英博物館で同館所蔵の櫻形文書の研究を終え、同年二月一六日帰国。

○中村賢二郎教授(西洋部)は、二月二八日成田発、ドイツ連邦共和国のホーエンハイム農科大学で一六世紀都市関係の研究及び資料収集を終え、四月七日帰国。
○森 時彦助手(東方面)は、二月二八日伊丹発、近代史研究所で五四運動の研究、

南開大学、四川大学等で資料収集を終え四月六日帰国。

○田中 淡助手(東方面)は、八一年三月二六日より南京工学院建築研究所で中国古代建築史に関する研究を終え、八二年三月二五日に帰国。

○岩熊幸男助手(西洋部)は、八〇年七月三〇日よりコペンハーゲン大学中世ギリシャ・ラテン文献学研究所等で中世論理学に関する研究調査及び資料収集を終え、八二年三月二九日帰国。

○横山俊夫助教授(日本部)は、五月一九日伊丹発、オックスフォード大学でヴィクトリア期英国における日本像の研究をし、九月二〇日帰国。



シンボリズムの探究

——象徴体系の構造論的研究班——

この四月から標記の名称の研究班を発足させることになった。いまのところ班員は総計九名の小世帯だが、もう少し人員を拡充したいので、勧誘のためのPRを兼ねて、本研究班のプランの概略を説明しよう。

本研究の研究対象である象徴体系つまりシンボリズムは最も広い意味に解していただきたい。実際、そうした象徴体系の中には、(一)神話、神学、形而上学のよ
うな、言語を使った象徴体系、(二)実際に演じられている宗教儀礼、エチケツト、民俗行事等の象徴体系、(三)絵画、彫刻、建築等にみられるイコノグラフィックな象徴体系が含まれている。

以上が本研究の研究対象であるが、そもそも研究というものには、研究対象だけではなしに、しっかりとした研究方法というものが明示されていなければならない。それゆえそうした研究方法を告げねばならないとすれば、いちおう構造主義的方法、あるいはもう少しゆるく、構造論的方法だと答えよう。いま挙げたような象徴体系のそれぞれを正確に記述し報告することは確かに意味のある仕事であるが、それだけでは学と

はいえない。学となるためには、そうした記述を分析し、重要な基本的要素をみつけ出し、そうした諸要素がどのような関係で結合しているかをあばき出さなければならぬ。そしてこれが構造主義的方法にほかならない。

こうした方法はとつくの昔から自然科学者たちが採用してきた科学の王道である。しかし人文科学者が人文的現象について、構造主義的方法を適用できないという理由はなにもない。適用できないと思われてきたのは、やらなかっただけのことであって、やってみれば現に優れた仕事がいくらも出現し始めている。そしてそのはしりが、レヴィ・ストロースによる、親族関係における群論的構造の発見(一九四九年)であった。

筆者自身もそうした構造主義的方法を使っていくつかの成果を生み出したのであり、そうした方法の効果についてはいささかの自信ももっている。とはいえど共同研究においてもそうであるが、研究対象はいちおうの枠をとりきめておくものの、研究方法の方は班員の完全な自由に属する。それゆえ本研究班においても象徴体系の現象学的記述もよし、起源系譜伝播の解明をおこなうもよし、象徴体系間の通時的・継時的な比較研究もよし、そしてそれに構造的な研究がつけ加われば更によしというわけなのである。(山下正男)

傅衣凌氏の中国封建社会論

—— 明代の政治と社会研究班 ——

四月から七月まで三ヶ月間、廈門大学教授傅衣凌氏を外国人客員教授としてお迎えした。氏は、明清時代の社会経済関係の数多い著作を以て、この方面では世界的にも最も著名な学者である。また、戦前、政法大学大学院に留学されたこともあり、その学問的方法論に於いても、我が国の研究者に最も親しみ深い。七十才を迎えられた老先生には少々申訳けなかつたが、この折角の機会を利用して、研究班では、研究者を対象に集中講義をしていただいた。テーマは「明清社会経済変遷論」、五月十七、十八、十九日、六月二十四、二十五、二十六日の計六日間、東京・大阪・名古屋など遠方からの参加者をふくめ、毎回二、三十名が聴講した。氏によれば、中国の封建社会は、ヨーロッパや日本とも異なつた地主型のもので、非常に弾力的な社会構造として「早熟でありながらも未成熟」であることを特徴としている。そこでは商業資本・高利貸資本が早くから発達し土地売買も自由で、農民も土地を離れる自由をもっていた。したがって支配階級である地主には、中特権をもつ身分性地主と非身分性地主ができたが、中

国の封建社会の主流を占めたのは、むしろ特権をもたぬ非身分性地主であった（この点は日本の郷紳論と全く異なる）。中央集権の官僚政府は、農民を支配するために、地方の郷族勢力を利用したが、この郷族というのが、日本の郷紳に対置せられる氏独特の歴史的概念である。これは一種の血縁的地縁の共同体ともいべきものである。郷族の構成は複雑で、官位のない土豪・里闈などもふくまれ、大部分が非身分性のものでありながら、地方に特殊な勢力をふるつた。そこでは宗族結合が階級対立を極めて曖昧なものにしていた。

封建社会後期には、山区を中心に資本主義の萌芽が出現したが、この地域はむしろ奴隸制や村落共同体遺制の強い地方で、その発展はきわめて緩慢なものにならざるを得なかつた。中国の封建社会には新しい要素と旧い要素が同時に共存し、その早熟性が、かえつて社会の成熟を妨げたのである。

現代化を急ぐ中国の今日的な問題意識をふまえながら、熟をこめて語られる老先生の封建社会論は、半世紀にもわたつた氏の研究生生活の蓄積を傾けられたものであるだけに研究者に大きな学問的刺戟を与えるものであった。なお研究班では、七月十三日、氏の講義に対して日本側の意見を申述べる機会をもつた。

（小野和子）

情報の経済史をもとめて

——日本領事報告の研究班——

一 国の輸出が順調に拡大するためには、輸出諸商品の国際競争力が強いことが肝要であり、国際競争力とは、輸出価格に表現される生産性の大小にほかならない。市場が完全競争的であるとすれば、これはこれでよい。しかしながら、現実の輸出競争において、そこで新規に参入しようとする供給者は、いかにして市場を見つけたらよいであろうか。どのような商品がどこにおいて求められているのか、まずこの知識なしには、生産も販売もありえないのである。

一九世紀世界資本主義の「自由競争」は、生産力の競争であると同時に、情報の競争であった。イギリスを筆頭とする諸列強の経済的角逐は、その一面において通商情報戦であったことを知らなければならぬのである。

いわゆる「領事報告」とは、各国の在外駐在領事が本国に送った、通商経済情報を中心とするレポートを指す。イギリス、フランス、アメリカ、等々の領事報告は、まさに、通商情報戦における最前線報告にはかならない。日本領事報告の特質は何か。

一九世紀後半という時点において、二百数十年の鎖国の後に世界市場に参入することになった日本にとつて、すべては新しい経験であった。外国でモノを売ることは、その国の政治と文化を知ることであった。リヨンの生糸市場の好況不況は、イギリス労働者のストライキとどのようにつながっているのか。朝鮮人はなぜ白という色を好み、中国人はなぜ方形・円形という形態を好むのか。

やがて三井物産、日本郵船、横浜正金銀行によって分業供給される世界の通商情報も、まずは政府機関によって直接収集・伝播される必要があった。今日悪名高い「日本株式会社」の原型としての明治期「日本商店」の調査資料部の在外エイジェント、それが「領事」であり、その本社宛レポートが「領事報告」であった。これが、われわれのひとつの仮説である。

「領事報告」の周辺情報の勉強から始めて、三年間という限られた時間でどこまでいけるものやら。班長の馬力に期待もし、恐怖もしている今日このごろである。

(山本有造)

旅

ケベック弁

多田道太郎

私がパリへ行っていやなことは、私のはなすフランス語がフランス人によってかたっぱしから訂正されることである。ところが、そのパリに次いでフランス語人口の多いモントリオール（ここで約六ヶ月を生活した）では、フランス語をはなす日本人、とパンダのようにあつかわれ、私のことばはよく通じ、しかもほめられた。

意外に知られていないことだが、ケベック州はフランス語圏である。フランスの新聞雑誌が二口おくれるくらいでほとんどみなはいってくるし、交通標識もすべてフランス語で表示されている。

このフランス語はケベック弁である。ラブレール時代のフランス語がそのままのこっている。辞書にはのっていないようなかわった表現も多い。ビエール・フロワド（冷しビール）とか、英語風のソシオロジックマン・バルラン（社会学的に言う）など、フランス人の笑う表

現が多い。私の「国際フランス語」を彼らがすぐ理解してくれるのは、「標準語」のかたくなさから、彼らが解放されているからであろう。彼らもパリへ行けば、笑われる。笑われて訂正される。フランス人は教えるのが大好きな国民である。

ブルターニュとどこか似ている点がある。フランスを精神的にも距離をおいてながめている。パリ中心主義にならうことはなく独自の文化を育ててきた。アントニー・マイエは「近代の悪にまみれないフランス語をもちつづけ、深層においてことばをみがいてきた」と誇る。ここではフランス文化を「偏見」なしに享受できるのがよい。

私の住んでいたマンションは都心だったがその近くにすばらしい野球場があった。このEXPO（万博にちなんで）というチームはアメリカンナショナルリーグ第二位の強さを誇っているらしい。応援のしかたが日本とちがって個人的で、「カケフ・カケフ」と群集がひとつになってコールするという気はくがない。口々にバラバラに熱狂する。相手がエラーするとスクリーンに大きくからかうようなマンガが出て、それを見てわーっとう歓声をあげる。フランス人は野球を好まないといわれているが、ケベック人は大好きである。フランス語で熱狂的に応援している。ストライクはプリース、アウトはルトレ

ット、一塁はプルミエール・ビュット、ショート・スト
ップはアレ・クルル……等々、はじめて野球フランス語
をおぼえてきた。

野球みて、映画みて、フランスの新聞よんで、フラン
スの悪口いいながら、フランス語をしゃべるといふ、こ
れは私の気分によくあつた滞在であつた。

休息する人びと

——南京一年のメモから——

田中 淡

日曜日とか祝日、あるいは学校の夏休みなどのことを、
中国語で「放假」^{フアジヤ}といっている。国慶節^{グオチンジェ}（十月一日）も
春節^{チンジェ}（旧正月）も「放假」で、大多数の人が仕事は休み
になる。一方、日本語の「休む」「休憩」に相当すること
は「休息」^{クシツ}という。遺跡調査の合間の一服も、サッカー
のハーフタイムも、同様に「休息」である。日本語に類
似してよく分るみたいで、じつはこの二つのことばの意
味するところ、決定的な区別のあるところに気がついた。
中国人は働くことが、一般に嫌いなようだ。こういう
と、またぞろ日本人は働きすぎ、一昔前に比べれば、等
等の声が出そうだが、その是非を云々するのではない。



チユンウエ フーツミヤオ
春節の露店（南京・夫子廟にて）

ごく少数のちゃん仕事をする人たちが「光荣榜」に写真入りで表彰されるのは、大多数がそうでないからだという、至極当然の事実に、恥ずかしながら、やっと私は気づいたのだ。で、とにかく、彼らは日本流にいうと勤務時間内に、しばしば「休息」する。郵便局に早朝、航空便を出しに行つて、窓口の女事務員が朝食の粥飯をかっこんでいたら、しばし待つことを余儀なくされるし、図書館の閉館十分前に飛びこんだところ、出納台の女性がたまたま一年ぶりの旧友の来訪を受けてお茶を入れたばかりだったら、その日は本の借出をあきらめた方がはやすい。鉄道の駅や公安局の職員がお茶を飲んでいたら、一つのことを問い合せるのも、しばしば容易でない。これをもって「休息」と称する。「休息」の間、彼らは大声で雑談に興じ、あるいは新聞を読み、あるいはお茶を飲む。これは彼らにとつてごく自然のペースであるらしく、その証拠に「休息」の最中に仕事が入ると、きまつてひどく不機嫌になる。

「休息」している時のこの国の人びとの表情は、おおよそ楽しそうではない。かといつて後めたい風でもない。身柄を拘束されていることにかわりないからであろう。これが「放假」となると、打つて變つて楽しくなる。天下晴れての休日だから当然だ。国庆节が金曜で、日曜を土曜と振り替えた二日連休とか、春節の五日連休の時に

限つて、この国の人びとの顔は本当に明るく、楽しく、愉快そうな表情をたたえる。年に二、三度しか見られない浮かれた雰囲気で、街がいっぱいになる。行楽地は人、人でいっぱいになる。なぜ年に二、三度かというかと、祝日が絶対的に少いからだ。もっと「休息」を少くすれば、「放假」が多くなるだろうに、というのが、ある友好的で勤勉な日本人の感想である。

孫文の故郷

狭間直樹

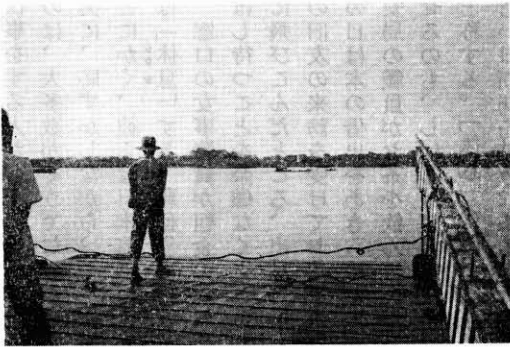
孫文の生れ故郷、広東省中山県(もとの香山県)の翠亨村は、中国近代史の研究者ならだれでも一度は訪ねたところである。三年ばかりまえ、自由化の政策の一環として、香港、澳門から自由に旅行できるようになつたとの報道があつた。そのとき、小野川秀美先生が是非とも行きたいと言われたので、先生の健康の回復をまつてお伴するつもりだった。しかし残念ながら、その計画を実現することはできなかった。

ところが昨年十月、小野信爾氏らとともに翠亨村の土を踏む機会を得た。武漢での辛亥革命七十周年記念シン

ポジウムに参加した外国人研究者にたいする慰安旅行としてである。

翠亨村は、マカオからなら三七キロだが、広州からは一二〇キロたらず、パトカー先導つきでとぼして四時間あまりの行程である。珠江の大きな支流には橋がまだなく、フェリーが四カ所もあるから、わりに時間をくうのである。渡しは北から順に三洪渡、容奇渡、細容渡、沙口渡。いずれも市三百メートルはゆうにある感じで、流れの方向を眺めやれば、茫洋たる江水が碧空をかきるばかりであった。

沙口渡の南岸が小欖、ちよつとした地方市場の中心である。辛亥革命のさい、広東省で最初に民軍が蜂起した地で、ここから中山県にはいる。ちなみに、清軍との攻防戦がたたかわれた梟城の川は想像よりかなり小さなものだった。



珠江支流の渡し場——三洪渡

その日は十数キロ手前の中山温泉賓館なるやたらと広大な宿舎に泊り、翌朝、目的地へとむかった。『半農半漁』の翠亨村と海辺のあいだに、小なりとはいえ山が一つあるのには驚いた。

熱帯らしい常緑樹の色彩とはきわだった対照をなして、『孫中山故居』はえんじ色に塗りあげられていた。正面は一、二階とも八本の柱にささえられた七つのアーチを配する堂々たる建物である。ハワイで華僑として成功した孫文の兄が一八八五年に一階部分を建て、九二年にさらに二階を増築したものという。車上より遠望した他村の華僑屋敷にはもつと豪華なものがいくらかもあったが、それにしても一般の住居とは段ちがいである。以前の家は九×四メートルの平屋だったらしいから、まずふつうの住居といつてよいが、故郷の地でのこの強烈な対比が孫文の西洋を追いこそうとする革命のイメージの核になったことは疑いないだろう。

故居に附設された陳列館では、さらに所蔵品を充実させるべく、孫文関係資料の寄贈をひろくよびかけていた。日本でのひとつの研究として、小野川先生が孫文解説を書かれた『世界の名著 孫文・毛沢東』を先生の名で贈ることによってさきに果せなかつた約束に代えよう、と考えたとたんに、孫文や辛亥革命の研究がなにか大変身近かなものを感じられたのだった。

泳がざるの記

園田英弘

南へ、南へ、アメリカ東部海岸を下りたいと思ったのは、特別の理由があったわけではない。ボンヤリと地図を眺めていたら、海岸ぞいに長々と連なる砂州が目にはいり、さぞかし美しからんと思ったのが一つ、また、ボストン近郊の海は、寒流のせいで、泳ぐには冷たすぎ、海水浴のためには、南へ下る以外にはなかったのが、理由といえは理由といえるものであった。

私の家族と友人のO氏を乗せて、わが愛車はスタートした。長い、寒い冬の後の、突然とも言える夏の到来は、日本の夏より一層、こころを浮きたたせるものがある。

最初の目的地のニュー・ジャージーの海岸まで、ニュー・ヨークをうまく迂回できれば、半日の行程。

北にニュー・ヨーク、西にフィラデルフィアをひかえた、この海岸一帯は、絶好のサマー・リゾート地帯であるらしい。車窓に、見え隠れする海浜に、素晴らしい白砂。白砂の広がりの方うには、大西洋の紺碧が、もり上がるようにうねっている。道の両側には、色とりどりの、思

い違ったデザインの家々。海上には、ヨットの群。

わたしたち一行は、一刻も早く泳ぎたい気持ちにかられながらも、その顔は妙に沈んでいた。実は、既に数時間以上も、この海岸沿いの道（正確には、海・家・道の順で並んでいる）を走りつづけているのだが、奇妙なことに、海水浴場風の場所も、海辺のモーターもない。あるのはただ、別荘風の建物だけ。今日のところはせめて、海浜の散歩でもと思い、車を道ばたに止め、海に面した家の間の小道を通りぬけた。そこで、われわれが見たのは、Private Property, Don't enter という掲示板であった。

この夜は、海から遠く離れたモーターに泊ったが、この時は、まだ、一行の誰も、事態を正しく理解していなかった。大都市に近い高級リゾート地帯はこんなものだろうと考えた。翌日、再び海岸沿いを南下し、メリーランド州まで行った。そして、ついにわれわれは悟った、美しい海浜は私有地であって、地図の上に所々記してある State Beach という場所だけが、海浜の所有権と無関係の者でも、自由に近づきうる海浜であるということ。

われわれは、もうすっかり泳ぎたい気持を失っていた。私と西洋経済史を専攻するO氏とは、所有権の観念についての西洋社会と日本の比較というテーマに没頭した。「ピンボー人は泳ぐなというのか!」「アメリカ人の

バカどもは、どうして、こんな不平等に甘んじているのか」etc. しょせんは、しがないうラミ節。

この旅行、走行距離三〇〇〇キロ。一週間。その間、一度も泳がず、いや泳げず。

おくりもの

一九八一年度の人文科学協会助成金は、次の三氏におくられ、三月二五日に人文科学研究所において受賞式がおこなわれた。

1 松田 智弘氏

松田智弘氏は一九四五年岡山県に生まれ、龍谷大学において日本史を専攻し、同大学院博士課程を修了したのち、奈良市立三笠中学校教諭として現に教鞭をとるかたわら、桜井女子短期大学講師として文化史を講じている。氏は大学院時代から道教とその日本への流入に関する研究を始め、中学校の多忙な教務を果しながら、池田源太教授の主宰する「人間生態学談話会」に参加して研究を続け、また同時に『香芝町史』『上

牧町史』『当麻町史』など、奈良県下の町史編纂のための調査と執筆にもたずさわってきた。

今回公刊された『道教受容の研究』（一九八二年一月、人間生態学談話会刊）は、一九七二年以来、種々の学術雑誌に発表してきた六篇の論文に、新しく二篇を書き加えて一書にまとめたもので、縄文期から弥生期にかけての呪術や神観念、つまり道教を受け入れる素地としての日本人の宗教観念を追求した部分と、その素地の上に道教的要素が受容された諸相を、主として奈良時代末までに限って追求した部分とから成る。問題の追求にはなお幾分の未熟さが残るとはいえ、従来の学界ではあまり注意されなかった領域の研究であるだけに、著者の意欲を評価して人文科学賞を贈り、それによって今後の更なる研究の進展を支援していきたいと思う。

2 小曾戸丈夫氏

浜田 善利氏

小曾戸丈夫氏は、一九二〇年生れ、熊本薬専卒業。薬局を経営し、針灸治療にたずさわるかたわら、中国の医学および本草学の古典の翻訳を志し、一九六九年には『靈枢経』・翌七〇年には『八十一難経』の現代語訳を独力で完成した。その後、訳業にいつそうの完璧を期するために、浜田善利氏（一九三三年生、熊本大学助手）の協力を求め、一九七一年から七六年にかけて、『西氏の共著になる『素問』・『靈枢』・『八十一難経』・『神農本草経』を矢つぎばやに刊行した。さらに一九八一年には、内藤希哲（十八世紀）による『傷寒論』・『金匱要略』（張仲景撰）の研究書『医経解感論』・『傷寒論類篇』を出版し、今日に至っている。

る。

この分野の古典の現代語訳といえは、従来は『傷寒論』（全訳）と『素問』（抄訳）くらいしかなく、専門家でなければ容易には近づけない状況にあった。小曾戸・浜田両氏の訳業は、漢代にすくなくともその原

型が成立したとみられる重要な古典とその研究書について、誰にも読める翻訳を提供したものであって訳文もおおむね妥当である。もちろん、古典学の立場から厳密に言えば、問題にすべき点はすくなくないが、針灸の臨床家および薬剤師としての知識と

経験にもとづくのであろう、医学・薬学の専門的な事柄についてはしばしば卓見を呈しており、欠陥を補ってあまりある。われわれ研究者もまた参考とするに価する訳業である。

外国人研究員

傅 衣 凌 厦門大学歴史系教授 中国の資本主義萌芽に関する諸問題 八二年四月一六日～同年七月一日

招へい外国人学者

方 紀 生 河北師範学院講師 現代中国の社会と文化 八二年六月一日～八三年三月三十一日
楊 曾 文 中国社会科学学院 世界宗教研究所助理研究员 「隋唐時代の道教と仏教」班に参加。八二年一月八日～四月一日

お客さま

八一年十二月三日
イリノイ大学教授
八二年一月二二日
北京大学歴史系教授
四月六日

Edward T. Hall

羅 榮 渠

Institut für Tibetologie und Buddhismuskunde der Universität Wien Prof. Dr. Ernst Steinkeller
四月八日

西北大学友好考察団
西北大学副校長
科研所副所長
物理系教授
経済系副教授

鞏 重 起
甘 棟 征
張 慶 嵩
何 煉 成

計算機科学系講師

周 国 棟

五月一〇日

国立シンガポール大学人文社会学部

英文学科教授

Edwin Thumboo

歴史学科講師

Yong Mun Cheong

中国研究科教授

Lim Chee Then

地理学科教授

Ooi Jin Bee

哲学科準教授

Ho Wing Meng

中央図書館目録係長

Jill Quah

五月二五日

ルーヴァン大学教授

Léopold von Genicot

東洋学文献センター講習会

一九八二年度 第一二回 漢籍担当職員講習会 (初級)

第一日 (五月三一日)

漢籍の分類について (講義)

井波 陵一

新学書及び中国の出版事情 (講義)

森 時彦

第二日 (六月一日)

漢籍の整理について (講義)

尾崎雄二郎

実 習

第三日 (六月二日)

道蔵書について (講義)

麥谷 邦夫

実 習

第四日 (六月三日)

和刻木について (講義)

平田 昌司

実 習

第五日 (六月四日)

漢字の電算処理について (講義)

星野 聰

文献目録の電算処理及び実習 (講義)

北川 一

第六日 (六月五日)

情報交換・質疑応答

感銘を受けた本

平田 昌司

長井勝一『「ガロ」編集長』(筑摩書房)

樋口 謹一

中井久夫『分裂病と人類』(東京大学出版会)

角山 栄

栗本慎一郎著『光の都市 闇の都市』(青土社)

川添登『裏側からみた都市』(NHKブックス)

書いたもの一覧

一九八一年二月～一九八二年五月
(五十音順、●印は単行本)



●飛鳥井 雅道

●『史料大系・日本の歴史8・現代』(編) 大阪書籍 一二月

●浅田 彰

構造とその外部(二)(三)(四) 現代思想 一・三・四月
プログラム 現代思想 二月

書評・今村仁司『労働のオントロジー』読書新聞 二月八日号
書評・広松渉『唯物史観と国家論』

朝日ジャーナル 四月二三日号

●浅原 達郎

一九八一年の歴史学界(中国―殷・周・春秋) 史学雑誌 五月

●荒井 健

李義山七律集稿(二)(共筆) 東方学報 五四冊 三月
初唐の文学者と仏教―王勃を中心として― 『中国中世の宗教と文化』 三月

漢語文献の索引と引き方について 人文 二五号 三月

●井上 章一

談叢近代日木関係洋書Ⅲ 人文学報 五〇号 (八一年) 三月
ファッションの空間と象徴―帯冠様式 人文学報 五一号 三月
『宮型霊柩車』の成立と展開 人文学報 五三号 三月

●若熊 幸男

“Instantiae: A Study of Twelfth Century Technique of Argumentation with an Edition of Ms. Paris BN lat. 6674 f. 1-5”, *Cahiers de l'Institut du Moyen-Âge Grec et Latin*, Copenhagen 1981

●宇佐美 斉

翻訳・イヴ・マリ・アリュエー「戦後詩を読む」

詩園
ボードレール『悪の花』憂鬱篇註釈(共同執筆) 人文学報 五二号 三月
詩園
からんす 十二月―三月
毎日新聞 一月―四月

●上山 春平

朱子の『家礼』と『儀礼経伝通解』 東方学報 五四冊 三月

●川 勝義雄

“A propos de la pensée de Huisi”, *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, tome LXIX (A la mémoire de Paul Demiéville), 1981.

中国的新仏教形成へのエネルギー―南岳慧思の場合

『中国中世の宗教と文化』 三月

翻訳・マックス・カルタンマルク「中国における水没し

た町の伝説」 東方宗教 五九号 五月

●久保由美

西鶴の語法と文体―浮世草子の文頭構造と文末形式について― 外国語・外国文学研究・5 二二月

客語・対象語 日本語教育事典 大修館書店 三月

●桑山正進

玄奘(人物 中国の仏教) 大蔵出版 二二月

迦畢試国編年史料稿(下) 仏教芸術 一四〇号 一月

仏像と遊牧民 京大学生新聞 一〇二号 二月

バス―考古記 ガンダーラ遺跡の調査(中央アジア学

術調査隊一九八〇年度報告) 三月

東方におけるサーサーン朝貨幣の再検討 東方学報 五四冊 三月

書評・Haimetian I, by Fukai, Sh. & MATSUTANI, T. オリエンツ 二四卷二号 三月

葱嶺山と阿路孫山『考古学論考 小林行雄博士古稀記念

論文集』 平凡社 五月

●佐々木 克

回顧と展望 史学雑誌九一一五 五月

●杉山正明

幽王チユベイとその系譜―元明史料と『ムイヅルルア

ンサーブ』の比較を通じて― 史林 六五卷二号 一月

クビライ政權と東方三王家―鄂州の役前後再論―

●田中 淡 東方学報 五四冊 三月

●中国の建築(監修) 小学館 四月

●多田 道太郎 祭りのふるさと 一月

祭りのこころ 美しい日本 一六 朝日新聞社 一月

『日本語の作文技術』解説 朝日新聞社 一月

ボードレール『悪の花』憂鬱篇註釈 人文学報 五二号 三月

ニッポン遠望(一〜八) 京都新聞 四月―五月

四季つれづれ(一〜五) サンケイ新聞 五月

●竹内 実 世界 一月

魯迅と孔子様 世界 一月

戌どしとメイカンシー 京都新聞 一月四日

●中国喫茶詩話 淡交社 一月

中国とポーランド 京都新聞 二月二三日

ポーランドと中国 新日本文学 三月

お茶と羊肉餅 京都新聞 三月八日

中国の新憲法草案 京都新聞 五月二六日

●角山 榮

共通論題・世界資本主義とアジアの移民・問題提起

社会経済史学 四七卷四号 一二月

日本米の輸出市場としての豪州―日豪通商史の源流を尋

ねて― 経済理論 一八五号 一月

●路地裏の大英帝国(共編) 平凡社 二月

経済史研究の原点―芭蕉『奥の細道』― 経済セミナー 三月

緑茶文化と紅茶文化(二)(三)

福寿園ニュース 三一五月

いま生活史を問う視点

聖教新聞 三月一六日

クス名譽領事

日豪ブレティン 二五号 三月

市民社会を象徴するウォッチとクロック―受け継がれるもの(ヨーロッパ)―

季刊民族学 二〇号 四月

書評・中川敬一郎『比較経営史序説』

経営史学 一七卷一号 四月

和歌山の文化を考える

南海道研究 六〇号 五月

ヨーロッパ人と「茶」の発見

遠やまびこ 五月

● 礪波 護

唐中期の仏教と国家(『中国中世の宗教と文化』)

人文科学研究所 三月

邦に道なきとき

マイタイム 一〇号 四月

出土文物による最近の魏晋南北朝史研究(唐代史研究会編『中国歴史学界の新動向』)

刀水書房 五月

● 富谷 至

書評・林劍鳴『秦史稿』

東洋史研究 四一巻一号 六月

● 中村 賢二郎

書評・ブラシユケ著・寺尾誠訳『ルター時代のザクセン』

社会経済史学 四八巻一号 二月

● 狭間 直樹

辛亥革命期における階級対立

中国研究月報 三月号

● 五四運動の研究(共編、第一分冊『五四運動研究序説』)

執筆)

上海の小菜場

同朋舎 三月 同朋 四月号

● 林 巳奈夫

中国古代の石庖丁形玉器と骨鏃形玉器 東方学报 五四 三月
画像鏡の凶柄若干について―隅田八幡画像鏡の原型鏡をめぐって『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』

● 樋口 謹一

平凡社 五月

● 安藤昌益と中江兆民――

△復眼△をもって見はるかす主体 日本読書新聞 一月四日・二一日

● 平田 昌司

翻訳・小川環樹「説尾崎雄二郎『漢語語音史研究』」

世界華学季刊 二一三 (一九八一年) 九月

△刊謬補缺切韻▽的内部結構與五家韻書(二)

均社論叢 十一号 五月

反切上字「匹」の一解釈

均社論叢 十一号 五月

● 福永 光司

鬼道と神道――日本古代と中国古代の宗教思想

駒沢大学宗教学研究會刊 『宗教学研究』 第十輯 十二月

伊勢神宮と道教 東京書籍 『教室の窓』 三一二号 一月

猶お龍のごとく――『猶龍』

筑摩書房刊 『吉川幸次郎』 三月

● 道教と日本文化

人文書院 三月

● 中国中世の宗教と文化(編著)

京都大学人文科学研究所 三月

道教における天神の降臨授誠

『中国中世の宗教と文化』 三月

●松井 健

アフガン遊牧民『篠山紀信 シルクロード』 5 パキス

タン・アフガニスタン・イラン』 集英社 七月

書評・山本福義・南雲藤治郎述『山と狼師とケモノたち』

季刊人類学 一二巻二号 七月

ほか

コメント・吉田集而『空間認識の類型化について』

季刊人類学 一二巻三号 九月

動物・植物の民俗分類『現代のエスプリ別冊 現代の文化

人類学1 認識人類学』 至文堂 三月

●麦谷 邦夫

『黄庭内景経』試論 東洋文化(東京大学東洋文化研究所) 六二号 三月

●村田 裕子

翻訳・田漢追憶(夏衍、鳳子原作) 東亜 一二月号

端木蕻良の文学に於けるトルストイの影響

中国文学報 三三冊 十月

●森 時彦

中国における勤王倫学運動研究の動向

東洋史研究 四〇巻四号 三月

●柳田 聖山

今月のことば 花園 十二月―五月

花園 一二月―五月

●中世漂泊(法蔵選書8)

法蔵館 一二月

●禅語の四季(茶道文化叢書)

淡交社 一月

●禅語と寂室(シンポジウム「中世の瀬戸内」下)

山陽新聞社 一月

一―三四五六七 清泉5 大本山国泰寺 一月

●禅仏教をゆく・その一 禅文化1〇三 禅文化研究所 一月

The Search for the Real Dogen-Challenging Taboos

Concerning Dogen Young East Vol. 8 No. 1 一月

●中国仏教の開花(図説「日本仏教の原像」)

法蔵館 二月

●禅の時代(図説「日本仏教の原像」)

法蔵館 二月

●祖堂集索引・中冊 京都大学人文科学研究所 三月

●十牛図・自己の現象学(上田閑照と共著) 筑摩書房 三月

●禅とは何か(日本の文化) NHK国際放送台本 日本放送協会 三月

少室逸書と敦煌本二八四行論長卷子のことなど(鈴木大

拙全集第八巻月報) 岩波書店 三月

●業火洞然(「伝統と創造」第二輯) 大谷大学 三月

●唐木順三の禅学(唐木順三全集第十三巻月報) 筑摩書房 四月

●庭先の芍薬畑が見えるかい 清泉6 大本山国泰寺 四月

●空病の問題(仏教思想7「空」下) 平楽寺書店 四月

●禅の本質(日本の文化) NHK国際放送台本 日本放送協会 四月

●京都と若狭(水上勉仏教文集3「仏教小説」解説)

日本放送協会 四月

筑摩書房 五月

禪と日本人 (日本の文化) NHK国際放送台本

日本放送協会 五月

普及案のこと (医事新報)

五月

●山下正男
知の普遍性と特殊性

哲学 三二号 五月

●山田慶児

朝日新聞社 五月

●山本有造

●科学と技術の近代 (朝日選書)
「旧日本帝国」の域内・対外貿易マトリックスの作成(1)
(溝口敏行共筆) 一橋大学経済研究所・Discussion
Paper No. 53

二月

書評・中村隆英編『戦間期の日本経済分析』

史学雑誌 九一編 二号 二月

討論・一九世紀における日本の経済成長 (梅村又次・尾
高煌之助・新保博・西川俊作と)

季刊現代経済 四七号 四月

●横山俊夫

談叢近代日本関係洋書 IV (26 R. M. Jephson &
E. P. Elmhirst, *Our Life in Japan*, London, 1869.)

人文学報 五二号 三月

A・B・ミットフォードによるイギリスへの日本紹介

人文学報 五三号 三月

●吉川忠夫

一八六九年と七二年を中心にー 人文学報 五三号 三月

裴松之のこと (『世界古典文学全集』二、四卷B、月報)

筑摩書房 二月

病室の父 (系原武夫他編『吉川幸次郎』
仏は心に在り——「白黒論」から姚崇の「遺令」まで——
『中国中世の宗教と文化』)

筑摩書房 三月

●吉田光邦

死のゲームの始まり

人文科学研究所 三月

科学の進歩と模倣

廣告批評 一月

花ごよみ

マンパワー 一月

中国史の視角

京のれん 二月

潤滑文化論 (対談)

学術月報 二月

茶の湯の成立と利休

いま潤滑文化 三月

情報環境の成立

モービル文庫 三月

戦争と視覚メディア

人文学報 五二号 三月

室町びとの口々

人文学報 五三号 三月

茶花の歴史と心

MOA美術 三、四月

科学史のなかのイスラム

茶花 四月

住むための上場

月刊NIRA 五月

鉄砲伝来と日本人 (対談)

国民生活 五月

取書さまさま

染織α 十二、五月

技術史の一断面

ブックレット 一、三、五月

●日本の色彩 (監修及文)

講談社 五月

TOTO対話 (対談)

東陶通信 三、五月

人

文

第二六号

昭和五十七年九月三十日

京都大学人文科学研究所発行

明文舎印刷

非売品